



小児歯科としての障害児の歯科管理

もうり小児歯科（福岡市） 毛利 元治

略 歴

1973年 九州歯科大学卒業、東京医科歯科大学見学生
鶴見女子大学小児歯科入局
1980年 九州大学小児歯科入局
1982年 もうり小児歯科開設

はじめに

私は32年前に福岡市で小児歯科の専門医院を開業して、『子どもや保護者も参加する診療』を目指してきました。年齢も性格も育成環境も違う子だけでなく、障害を持つ子どもも来院してきます。そして、子どもの受診態度は、患者さんと医療従事者双方の肉体的・精神的負担と、診療の質も左右します。

今回は子どもの受診態度の実際を紹介し、加えて小児歯科医院として長期管理してきた障害児（者）の経過を振り返ります。この中で、子どもの『成長発達に寄り添える小児歯科の楽しさ』を理解して頂けたら幸いです。

子どもの対応（子どもは強い、大人の固定観念を変える救世子）

『歯医者さんは痛い、怖い』という負のイメージは、患者さんだけでなく歯科担当者も受け入れているように感じます。一方、当院で用いている対応方法は、小児歯科の基本とされるTSDとモデリングなどに限られます。この環境下でも3才児以上になると、上手に受診できることを医院の調査資料で示します。大人の色に染まる前の幼児は、歯科のイメージを明るいものに変えてくれる、大人が見習うべき患者さんです。

患者さんの行動観察と、成功体験を高めるグッズ

子どもの受診能力を高める配慮は、ユニットの上だけではありません。ただし、それぞれの子は、言葉の理解力や、意思表示の能力や、障害の種類も違いますし、それらの内容も日々変化します。ここでは、子どもの心理的状态を知る簡単な方法と、診療後の達成感や成功体験を子ども自身のものにする方法やグッズを紹介します。

あるダウン症患者さんの管理を通して

最後に、1才4か月から29才5か月まで受診してきたダウン症で、16才頃からは自閉症も加わった患者さんの長期管理例を提示します。その中で、予防を中心にした診療の成果と、保護者から戴く意見やアドバイスが大きな力になることを伝えたいと思います。